

NEWSLETTER No. 37



**CWS
JAPAN**

Church World Service

インドで防災イノベーションの取り組みを始めました！

CWS Japanでは、以前からアジアにおける防災イノベーションの取り組みを進めており、英国のHumanitarian Innovation Fundとのパートナーシップを組んで推進しています。昨年からフィリピンにおけるマニラ首都直下地震の被害軽減に向けたイノベーション促進を展開していますが、今年からインドにて水に関係する気象災害（洪水や干ばつなど）に着目したイノベーションを発掘・支援すべく、インドのSeeds IndiaというNGOと組んで取り組みを始めました。インドでは毎年のように頻発する大洪水に加え、2016年には国土の大部分が水不足に見舞われ3億人以上が被災するなど、水問題は国家問題化しています。

防災イノベーションの取り組みで気をつけている事は、アイデアだけでなく、実践者が各分野の専門家やセクターを超え政府や企業など、課題に関係する機関・団体とパートナーシップを組むプロセスも含めて支援する事です。防災イノベーションに関して、企画書を受け付けている政府系助成機関（オーストラリアなど）もありますが、アイデアを具現化する初期段階における課題分析やパートナーシップ構築等のプロセスを支援する事は少ないのが現状です。しかし草の根から防災の課題解決に向けたイノベーションを展開するには必要不可欠なアプローチだと考えています。



インドでの研修参加者との集合写真

まず、最初のステップとして、10月1日～4日にかけて現地パートナー団体であるSeeds Indiaの職員や今後イノベーション発掘をファシリテートする他団体の職員向けにファシリテーター研修を行いました。扱ったトピックは、防災イノベーションの成功クライテリア、パートナーシップの重要性、課題やアイデア分析の各ツール、イノベーションを推進するファシリテーションの仕方などです。インドはイノベーションアイデアが満載の国であり、かつ扱う課題は国家規模という事で、どれだけの変革が起こしていけるか楽しみにしています。

日本でも度重なる豪雨災害が起こる中、私達は「New Normal」の時代に突入したと言われています。21世紀の災害被害が少しでも軽減できるよう、CWS Japanでは防災ソリューションを考え実行するプロセスを継続的に草の根から進めていきます。

（文：事務局長 小美野剛）

ACTジャパン・フォーラム活動報告/九州での種まき

CWSが加盟するACT Alliance（アクトアライアンス）のナショナル・フォーラム（国別フォーラム）として、ACTジャパン・フォーラムの運営委員会が今月発足しました。これまで運営委員会の準備委員会として2回の会合を持ち、日本キリスト教協議会（NCCJ）加盟教団・団体の中で防災と災害支援に関心を表明する団体に対して、ACT Allianceのポリシーとナショナル・フォーラムに与えられた新たな権限についてブリーフィングを行ってきました。その準備委員会の中で、ジャパン・フォーラムとして今後は頻発する国内災害に対して地域レベルで人道支援を行っていくという目標を掲げ、そのためには、平時のうちから、災害対応のための体制構築が必要であると、各地のキーパーソンとつながり、支援拠点を作ることを提案しました。

そこで、水害が頻発し、南海トラフ地震の警戒エリアにかかっている九州地区を最初のターゲット・エリアとして選び、10月初旬に1週間かけて、NCCJに加盟する主だった7つの教団・団体から紹介を受けたキーパーソンを訪問しました。私にとって九州は、2年前の九州北部豪雨災害支援のために1か月間滞在した思い出の土地です。今回の滞在中、その時に応援に入らせていただいた九州キリスト災害支援センター（九キ災）の横田代表と九キ災宮崎支部が開催した宮崎教会防災ネットワーク発足のための会議にもタイミング良く参加させていただくことができました。

今回1週間という短時間の中で、福岡から始まり、佐賀、熊本、鹿児島、宮崎と駆け抜け、計15名ほどの関係者に面会し、ACTジャパン・フォーラムとして、今後九州地域で災害が発生した時にいち早く人道支援を行うため、地域に立つ教会・キーパーソンとどのような連携を図っていきたいのか、一人ひとりに繰り返し、説明して廻りました。まさにそれは、九州という地での種まきのような作業でした。これまでの災害では、人道支援の意識が高い牧師が個人的に動いていたのですが、これからは組織的に動きたいという考えを聞いて、面会した一人の牧師先生がおっしゃっていました。「組織を動かすなら、教会がなぜ地域で人道支援をするのか、その意義を明確に示す必要があるだろう」と。教会は元をたざせば、先人達が、その地域に奉仕するために創った拠点だったはずです。現在頻発する災害と人道支援を通して、今一度、私たちは、本来の教会設立の原点を思い起こし、地域に立つ意義を考える機会ではないかと思いました。今後も九州地区のキーパーソンと連絡を取り合って、また九州に戻りたいと考えています。

（文：プログラム・マネージャー 牧 由希子）



訪問した日本バプテスト連盟福岡西部教会にて

Our Second Publication on Western Japan Flood of Last Year is Now Available

CWS Japan remains committed to its plan to gather the lessons learnt from each disaster in Japan, and share them widely outside the country. After our six-month report on the Western Japan Floods "[Lessons from Mabi](#)", we went back to study the developments in the recovery process, which had not officially started when we published the six-month report. We did the research by collaborating with Professors and Fellows from six universities: Ms. Jessica Alexander of Sophia University, Prof. Mikio Ishiwatari of The University of Tokyo, Prof. Sakiko Kanbara of University of Kochi, Dr. Takako Izumi of Tohoku University, Prof. Aiko Sakurai of Toyo Eiwa University, and Prof. Rajib Shaw of Keio University, who is also our Board Chair. The methodology included direct observation, interviews of the affected communities, volunteer organizations and stakeholders. We have summarized the findings in a report called "Towards Mabi's Recovery—Lessons One Year On", which can be downloaded from [here](#), or can be read from the QR code below.



The report identifies some of the most critical lessons from Mabi's flood response and recovery efforts, structured around the themes of People and Communities, the Natural Environment and Organization. The analysis of these themes leads to Ways Forward, which are aligned with the four [Priorities for Action of the Sendai Framework for Disaster Risk Reduction \(SFDRR\) 2015-2030](#). We hope that this learning contributes not only to Mabi's ongoing recovery, but is also used to inform other disasters, specifically flood responses globally.

（文：Research Coordinator Sangita Das）